

2019年の動向と処世について

1. 2019年の動向

2019年は干支暦で己亥年となる。空間を天干、時間を地支と定義し、時間と空間を組み合わせて現実が生まれるとしている。天干を甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の十種類、地支を子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二種類に分類し、天干地支の組合 天干 甲乙丙丁戊己庚辛壬癸 で干支暦は出来ている。十干と十二支で120パターンが 地支 子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥 出来て、その60個を陽、もう半分の60個を陰と定め、干支暦は陽の60個を使用する。その中で2019年は天干が己、地支が亥の己亥年となる。

まず己亥の意味合いを解説してみよう。十干の己は「おのれ」とも読み、糸束を作る糸車の象形文字で、多くの糸束を作り出す源という事が転じて、自分自身を意味するようになった。また己は引力本能の土性となり、自分自身に万物を引き寄せるという意味となった。己の3本の平行線には「条理が整然としている状態」という意味がある。更に己に「いとへん」を付けると紀という文字になる。紀は糸口や正しい筋道という意味に使われる。そこから己という文字にも、決まり事や正しい行いという意味を内包するようになった。また右図の通り、己は十干の中で中心に位置する。このように己は、生命エネルギーが盛んになり ピークを迎えた時期を司り、同時に正しい姿の自分という意味がある。



甲乙丙丁戊己庚辛壬癸

一方、亥は十二支の最後を司る。今までの12年間の最後を締めくくり、新たな子年へと継承する転換期となる。子は種子が土の中で発芽の時期を迎えた事を意味し、丑～巳で芽が徐々に育ち、午で陰陽の転換点を迎え、未～戌と実を付ける。そして最後の亥で地面 に落ちた種が土へ埋まり、次世代の生命へと繋がっていく。亥年は次の 最後 時代の流れへと新たな種蒔きをする時期である。亥は生命エネルギーが集約された事を意味し、次世代への橋渡しをする大切な準備期間を意味している。更に、亥に「きへん」を付けると核という文字になる。核は木の硬い部分を表し、物事の中心という意味を持つようになった。核爆弾がよい例だろう。このように亥は、大きなエネルギーを内在した状態で始動を待つ準備期間を意味している。次の新たな段階へとステップアップするタイミングをじっと待っている状態である。

子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥
発芽 生育 転換 収穫 種子根付き

それでは、己亥を組み合わせた意味を考察しよう。己と亥は、相生相剋論で土剋水という相剋の関係にある。相剋とは一方がもう一方を剋す状態である。己亥は、土が水を濁すという意味になる。溢れ出ようとする水の流れを土が堰き止める、または清流の流れを土が濁流にする。つまり己亥は、ステップアップする大事な時期にも関わらず、溢れんばかりのエネルギー(自我や自分の正しさ)がそれを邪魔をするという事になる。換言すると、自我を打ち出し過ぎる事で泥沼にはまり込み、将来のチャンスを失いかねない事を意味している。しかし亥の聰明さ、つまり自分の正しさを手放すと泥濘が歩みやすい土となる。つまり自分の正しさを手放していくれば、先々に大きなステップアップが望める良い年ともなる。2018年の戊戌で変転変化が起こり、2019年己亥年で新たなステージへの準備を行い、2020年庚子で大きく飛躍していく非常に重要な、そして良くも悪くも異常な状態が起こり易い3年間の2年目に該当する。この3年間はアップダウンが激しい時期でもある。従ってこの2019年の己亥年を、如何に丁寧に準備をして生きていくかが重要となる。己亥年は日本の再出発の準備の年となる。60年前には今上天皇の御成婚があり、ミッテーブームが起った。2019年は新しい天皇陛下の誕生となり、皇室の慶事があり、国内が明るいムードとなる。また既成概念が根底から覆される年となり、新たな価値観の創造する時期にもなる。それが出来ない業界、組織、個人は時代に取り残されていく。日本だけでなく、世界中で産業革命が起こる時期もある。過去の正しさに捉われず、新たな価値創造に積極的に望んでいく事が大切である。



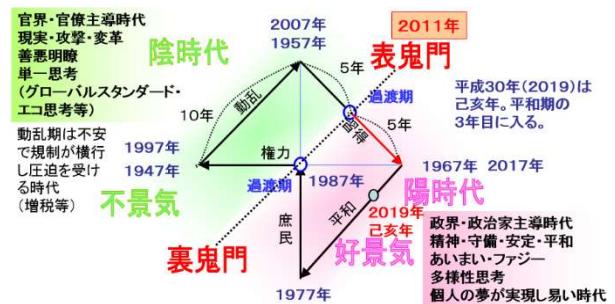
また己亥年は知的な庶民が活躍する年となる。己=庶民、亥=聰明を意味するからである。この年に良い運気を呼び込むには各人が努力と工夫をすることが肝要である。ではどうすれば良いのか。天干が己なので司禄星に変化する。従って開運の基本は笑顔と明るさ、そして整理整頓、更には人への優しさを意識することである。他者から感謝される人に不運な人はいない。また他者から感謝される企業に経営不振はない。この1年、今まで以上に他者から感謝される生き方と整理整頓を心掛けたら、己亥の異常な肯定的な強いエネルギーを受けて、幸せな日々を送れると暗示している。この年に注意が必要なのは、天候の乱れと地震である。地支が亥で激しい豪水を意味するので、気温の乱高下、土砂崩れからの津波等の水害、地域によってはかなり大きな地震が懸念されるので、防災には今まで以上に対策を考えて準備しておくことだ。

2019年は平和期（経済が発展する経済台頭期）の3年目となり、好景気時代に入る。概ね景気は良くなるだろう。日本の国運は上昇し、世界の中で、かなりの強運に向かうと予測できる。経済は世界と連動する。トランプ大統領の下降運気に伴い、アメリカはこの1~2年内に経済が失墜し、また中国の経済衰退の影響を受け、様々な不安定さは伴うが、日本単体で捉えた場合、経済は台頭していくと予測できる。2020年のオリンピック開催までは経済は活性化していく。また2025年に大阪場万博の招致が決まり、約3兆円の経済効果を生み出すと試算されている。オリンピック景気後、緩やかなアップダウンを繰り返しながらも、経済は徐々に台頭していくであろう。

時代論から観ると50年毎に似たような傾向を繰り返す。50年前の出来事を振り返ってみよう。50年前は1969年になる。1969年は十数局の民放テレビ局が各地に開局して、メディア改革が起こった年である。また気象状況が急変した。アポロ11号が人類初の月面有人着陸を果たし、住友銀行（現・三井住友銀行）が日本初の現金自動支払機を東京の新宿支店と大阪の梅田支店に設置。金融界に大きな革新を起こした。またスポーツ選手の活躍が目立った年である。この事から2019年も金融改革が進み、新たなスタンダードや技術が出来上がり、他業界でも革新的な技術導入が進み、一般社会通念が激変していく年となる可能性が高くなるだろう。そんな変化の時代の中で、AI（人工知能）やRPA（ロボットによる業務自動化）の台頭は大きな業務革新を起こしていく。定量化できる業務は全てAIやRPAに置き換わり、定量化できない「人間力」が問われる業務が人間に求められていく。今まで以上に「人間力」が各業界に求められていくだろう。日本は、二旬目の経済台頭期に入った。二旬目の経済台頭期は、経済台頭する者としない者に二極化する。その分かれ目は定量化できない人間力を高められるかである。その意味でも陰陽五行論を学び、人間力を身に着けていく事は時代論から観ても有利に働いていくだろう。

2. 2019年の処世について

2018年からの3年間は日本にとって、とても重要な時期となると昨年もお伝えした。2019年はホップ・ステップ・ジャンプのステップの時期である。より高く飛び上がる為にはステップのタイミングで一旦、深く沈み込む必要がある。己亥年は仕事もプライベートも、波乱や苦難が多くなる。己亥は別名、柔土の泥濘と云う。柔らかい水浸しの土の上を歩いていくイメージである。当然、足元を取られる。その苦労を甘んじて受け入れ、各自の所属する業界での基礎をコツコツと積み上げていく代償の先払いをする必要がある。また己亥は時代の苗代という役目も持っている。苗代とは田植えをする際の苗を育てる場所を意味する。次のステージにステージアップするための準備期間であり、自我を押し出して目先の利益を追うよりも、もっと先に享受できる大きな利益の為に他者のお役に



立つ意識を持つと良い。更に時代の苗代の役目を持つ己亥は、ある種の特殊性、異常性を保有するので、一般社会通念から離れた処世が功を奏する。換言すると、過去の生き方を大きく変えていく事である。仕事の仕方やプライベートの在り方を大きく変化させることである。その際に大切なのは他者の目を気にしないことである。他者は他者、自分は自分である。このチャンスの時期に陽転するのは2割の者である。8割の者が握りしめている既成概念に左右されることなく、新たな価値を創造していく事である。自我は打ち出さないが主体性を發揮していく事である。自分の人生は自分が源で作り上げていく意識を持つことである。他者の批判をする時間があれば、自分で何かを創り上げる時間を持つ方が効果的である。また地支の亥が豪水過ぎるので、その水の勢いを弱めるために、深紅を意識的に取り入れていく事が今年の改良方法の一つとなる。

2割：陽転者
8割 既成概念 から抜け れない者

己亥年はステップの時期であり、基礎の反復練習の時期であるとお伝えした。では基礎とは何か。業務や学業における基礎はみなさんが理解している通りであるので、それを積み重ねることである。では陰陽五行論の観点から論じると、何の為に生きているのかを探求する事が重要な基礎項目となる。みなさんは、何の為に生きているのだろうか。成長する為、幸せになる為、資産形成をする為、目標達成をする為、様々な回答があるだろう。ただ何をもって成長したとするのか、何をもって幸せなのは、人それぞれ基準が違う。目標達成すれば、際限なく次の目標が出てくる。1億円貯金すれば、次は10億円を貯金したくなる。1の評価を得れば、次は10の評価を得たくなる。一瞬は満たされるが、欲望は際限なく増幅してしまう。では本当に大切な事はなんだろうか。そして人は何故、生きているのだろうか。またその人生工程の中で何故、これ程までに苦しみを味わうのだろうか。当然人生には苦しみだけではなく、喜びや楽しみもある。ただ喜びや楽しみは一瞬で過ぎ去ってしまい、また苦しみや虚しさが訪れる。その根本となるメカニズムを知っておく必要がある。そのプロセスを仏教では四諦と云う。四諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦の4つから構成される。苦諦とは人生は苦に満ちているという事である。苦とは音写語で、意訳すると人生が自分の思い通りにならないと云う事である。人生は思い通りにならない事が大前提であると説いているのだ。自分の思い通りにならない人生を、自分の思い通りにしようとする煩惱に依って苦しみを味わうと云うのだ。つまり苦諦とは人生は苦であるという真理を説いている。人生は老・病・死を始めとする様々な苦に満ちている。楽しい事も経験するが、私たちが体験する樂は、いつか苦に変わってしまうかもしれないと云う、あやふやな樂でしかない。この意味で人生は苦なのだ。また集諦とは、その苦しみを煩惱に依って集めてしまう因縁を持つ事である。

四 諦	苦諦(くたい)	人生は苦(思い通りにならない)に満ちている
	集諦(じつたい)	その苦の根源は執着である。
	滅諦(めつたい)	この根源である執着をなくす事で人間は悩み苦しみから救われる
	道諦(どうたい)	心に浮かんでくる執着をひとつひとつ滅すれば良いのだと意識をして、実践を日常的にやっていく事

自分の思い通りにしたいという煩惱が人生に苦を集めてしまうのだ。したがって集諦とは、苦には原因があるという真理、あるいは、苦の原因は執着であるという真理の事である。若さ、健康、生命に執着するから、老・病・死を苦と感じるのだ。滅諦はその原因となる煩惱を滅すれば苦は訪れないという思考方法である。苦の原因である執着を滅した境地が滅諦である。道諦はその滅する意識を実践する事である。この四諦のプロセスを理解し実践すれば、苦惱を乗り越えていけると説いている。具体的な道諦のプロセスは八正道に説かれている。マインドフルネスでも有名になった八正道の詳細は後日、解説をしよう。更に苦諦は四苦八苦に分類される。人がおよそ自分でコントロール出来ない生理現象の生老病死の4つと、現実の人間関係で避けることが出来ない事象、つまり愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦の4つを合わせて四苦八苦と云う。まず生老病死について。生まれてきた事は自分ではどうする事もできない。生まれたからこそ、老病死の生

四苦八苦	
生	生まれる事は自分でコントロールできない
老	老いたくないと思っても老いてしまう
病	健康でいたいと思っても病気をしてしまう
死	死にたくないと思っても、必ず死はやってくる
愛別離苦	愛している人と別れなければならない苦しみ
怨憎会苦	怨んで憎んでいる人と会わなければならない苦しみ
求不得苦	求めているものが得れない苦しみ
五蘊盛苦	意識が盛んに働き過ぎているが故に苦しいという苦しみ

理現象の苦悩を体験してしまう。これを生苦という。そして生まれた以上、男女や身分を問わず、人間は必ず老い、病気になり、いずれ死んでいく生老病死のプロセスは避けられない。それなのに私たち凡夫は、いつまでも若くありたいと若さに執着するので老いが苦になる。またずっと健康でいたいと執着するので病が苦になる。更に長生きしたいと生命に執着するので死が苦となる。多かれ少なかれ人はみな、こうした執着を根底的に持っている。ただ仏教は生老病死という「事実そのもの」が苦であると説いてはいない事が重要である。若さ、健康、生命に対する「執着」が老病死を苦と感じさせるのだから、自分の執着を自制すれば、もはや老病死は苦ではなくなる。換言すると老病死という自然の摂理を受け入れ、それに従って生きていくなら、苦しみは生じることは無い。四苦は執着する人間を前提としているので、生老病死という人生プロセスそのものは、本来、苦でも楽でもないのだ。私たちの捉え方次第で苦にも楽にもなるのだ。この執着心を制御する方法や処世術を解説していくのが陰陽五行論の神髄となる。それでは何故、人間は執着するのか。それは人間の心中に潜む根本的な無明(無知)と、それに基づいて起こる渴愛と云う執着が原因であり、それを克服することで生老病死の苦悩を乗り越えていけるのである。人生の全ての事象に苦樂は無く、その人の捉え方次第で苦樂が決まるのである。渴愛の煩惱から生きると人生は苦悩の風景に彩られ、渴愛の執着から離れて事象を受容して生きると、人生は楽しい風景に彩られていくのである。四苦とは自分の心の在り方次第で人生が大きく変化していく事を教えてくれている。では人間関係における四苦の愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦を考察してみよう。愛別離苦は愛し愛される者同士が引き離されてしまう定めである事だ。生者必滅・会者定離である。生まれた者は必ず死に、会った者は必ずいつか別れが来るという事は誰も避けることが出来ない。怨憎会苦は憎しみ合う者が出会わなければならない事である。人生を歩んでいく上で、苦手な人に出会ってしまう事、そしてその人と接触しなければならない事は避けることが出来ないのだ。求不得苦は自分の思い通りに人生が展開しない事である。生老病死の項目でも触れたように、人生は思い通りにならないことが前提である。これを仏教用語で一切皆苦と云う。他者や世の中を一人間の思惑で、思い通りには出来ないのが現実である。例え一時期、自分の思い通りになる事があっても、それを何十年も継続することは、誰にも出来ないのが常なのだ。五蘊盛苦は自我に依る煩惱が収まらずに、苦惱をしてしまう事を云う。もっと欲しい、もっと認められたい、もっと食べたい、もっと楽しみたい、もっと愛されたいと云った「渴愛」と云う執着は際限がない。一瞬満たされても、もっと激しい刺激で満たされたくなるのだ。この四苦八苦は、自我の強い者ほど強く動いてしまう。だからこそ、私と云う存在そのものを見直していく必要があるようだ。それを解決する方法を、般若経典群が教えてくれる。その中でも、最も短いのが般若心経である。みなさんは般若心経を詠んじられるだろうか。般若心経の真意を理解できると人生がとても生き易くなる。般若心経の解説はいずれ行う事にする。ここでは四諦の中の苦諦、つまり人生は自分の思い通りにならない領域を二つの観点から次章で更に考察してみよう。

3. 他者との関係性から自分を知る

ブッダの覚りは、世の中は縁起である事を発見した事である。縁起とは全ては縁に依って、つまり関係性に依って構築されているという意味である。縁起と空は同じ意味であると捉えてよい。空は世の中は諸行無常であるということ。人生の全ての事象は移ろいやき、一つとして留まることを知らず、全ては縁に依って関係性の中で構築されるという事である。ブッダが探求したのは、生まれた者が年老いてゆき、病に倒れ、最後は死ぬという人生の根本苦を解決する事であった。その中でも最大の苦は死苦である。ブッダは死について思いを馳せらせた。「何故、人は死ぬのか」と。至った答えはあまりにも単純であった。すなわち「生まれたから死ぬ。生まれない者は死がない」という悲

しいほど単純な道理であった。通常、私たちは生と死を分けて捉える傾向がある。しかし、生と死とは、分かちがたく結びついている。生と死は表裏一体なのだ。この相互依存の関係を、縁起というのだ。生を縁として死が起こり、死を原因として生が結果として発生する。こんな簡単な道理にも気付かず、またこの無知に基づいて死を拒絶したり、生だけに執着しようとするから、苦が生じるのだ。表裏一体の片方だけを見ていたら、視野が狭くなり上手くはいかない。死を想い、受け入れる事が生を充実させるのだ。生と死とは別々の二つの事象ではなく、生と死とで一つの事象なのだ。縁起は、「全てのものは他者に起因して存在し、それ自身で独立して存在しているのではない」と説く。この縁起を「私」という存在で考察してみよう。時間的に見れば「私」という存在には両親の存在が不可欠である。「私」は両親から生まれたからだ。その両親はそれぞれの両親から生まれた。こうして過去にさかのぼっていくと、無限の命の連鎖の先端に「私」の命が成り立っているのが分かる。また空間的にも「私」は様々な他者(友人・食べ物・衣服・住居など)の無限の恵みに支えられて生きている。こう考えると、この世の全ては、網目状に張り巡らされた関係性の中に存在していることになる。つまり何らかの形で全ては繋がっているという事、この在り方が「縁起」の本意である。

視点を変えてみよう。「おはよう」、「こんにちは」、「ありがとう」。言葉は違っても挨拶をしない民族はいないだろう。では何故、人は挨拶をするのか。人間は社会的な動物だから、挨拶は人間関係をスムーズにする潤滑油的な役割を果たしているのは事実であるが、仏教的視点から見ると違う側面を見出すことが出来る。人は自分の姿を見るのに鏡を使う。鏡に自分の姿を映し、外見を確認する。手足は自分の目で見ることが出来るが、顔は自分の目では直接確認は出来ないからだ。ここに「自己」の存在の謎を解くポイントがある。顔の特に目は心を表すとされている。しかし目を自分の目で直接見ることは出来ないので「鏡」という「他者の存在」の力を借りざるを得ないのだ。私は講義で「自分の存在を定義して下さい」と質問をする事がある。すると様々な答えを返して下さる。組織人です。勇気があります。男性です。。。その次に「では、全ての答えの共通項目は何ですか」と問うと、静まり返ってしまう。それは「全ては他者との比較が前提になっている」からだ。「組織人」という答えには「組織人以外の人」、「勇気がある」という答えには「勇気がない人」、「男」という答えには「女」という存在がなければ意味をなさない。つまり全ては他者との関係性の比較が前提となっているのだ。「自己の存在」の規定は、必ず「他者の存在」を前提にしている。自己の存在の中には既に他者の存在が入り込んでおり、他者の存在なくして自己の存在は規定できないのだ。鏡に映さなければ自分の顔を認識できない様に、他者の存在を鏡にして自己を映し出さなければ、自己の存在は知ることが出来ない。つまり、私たちは自己を直接認識しているのではなく、「鏡」という他者に映し出された自己」、つまり他者との関係性に依って自分を認識するのだ。これこそ仏教で説く「自己は他己に依り、他己は自己に依って存在している」という縁起の関係であり、両者は表裏一体の関係なのだ。他者が存在するから私が存在する、この関係性の上に成り立っているという認識を持って現実を見渡すと他者への視点が変わってくるはずである。

先ほどの問い合わせ、人は何故、挨拶をするのかに話を戻そう。あなたが他者に挨拶をして返事が返ってこなかつたら不快な思いをするかもしれない。それは「自分という存在が確認できなかった不快さ」なのだ。挨拶は返事を返してもらう事を前提にしている。誰かに「おはよう」と言えば「おはよう」と返して欲しい。返事をしてもらう事で、自分を確認しているのだから、返ってきた挨拶こそ「自己存在の証し」といえる。挨拶には様々な機能があるが、仏教の世界観から観ると挨拶は自己存在を確認する手段だと考察できる。だから知人に会うたびに挨拶をし、その挨拶が返されることで、何度も自己存在を確認しているのだ。丁寧な挨拶は丁寧に自己存在を確認でき、軽薄な挨拶は自己存在を浅く確認する手段になる。だから挨拶を無視されると私たちは不安に襲われてしまい、不快感を味わうのだ。一方、自分の存在をしっかり受け止め、挨拶を返してくれる存在に出会えば、安心する。

人とはそういう存在なのだ。自分は他者と不二の関係にあるから、それを引き離して「自分とは何ぞや」と考えても答えは出ない。「他者との関わりの中で自分はどう在るべきか」という視点がないと「自分とは何ぞや」という問いは虚しいものとなる。生まれた以上、だれしも幸福な人生を体験したいと願う。では幸せになるにはどうしたらよいのか。自分と他者を引き離し「私一人の幸せ」を考えたのでは真の答えは出てこない。「自分と他者は不二であり、他者が居るから私が存在している」という世界観から眺めると「他者を幸せにすることが私の幸せである」という道が見えてくるはずだ。陰陽五行論の世界観から論じれば、「まず他者に与えよ」という土性の引力本能を意識することである。全ては関係性の中で成り立っている。この関係性を無視しては善き人生を歩んではいけない。他者や世の中は自分ではコントロールし難い存在ではあるが、私たちを映し出してくれる鏡の存在もある。その他者が存在しない限り、自分が存在できない。他者が居るから私が居るのだ。他者が居なければ私が存在できないのだ。だから他者と「対立」を作るよりも、より良い「関係性」を構築する意識を持つことが、2019年の己亥年をよりよく生きていくポイントの一つとなる。

4. 死(限り)があるから豊かさを知ることが出来る

仏教は諸行無常を説く。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」で始まる平家物語の冒頭部は無常観を説いている。全ての事象は移り変わり、一つとして留まることを知らずという自然の道理を表現したものである。「ゆく河の流れは絶えずして」で始まる鴨長明の方丈記は、「この世のものは全て移り変わり、永遠に留まるものなど何もない」と説いている。ゆく河の流れの如く、一瞬後には、同じ場所に元の水は存在しない。これが諸行無常の意味である。日本人は桜好きだがそれは一瞬で花を散らしてしまう無常観が根底にあると推測できる。桜や自然の花々は生きているのであり、生きている花は開花すれば必ず枯れ散る。生まれた事象は必ず滅する。枯れ散ってしまうからこそ、今というこの瞬間は一度きりで、それを見過ごしたら、二度とその今は戻ってこない。だから今日しかないと人は花見に出かけるのだろう。親鸞は次の歌で世の中を表現した。「明日ありと 思う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものかは」 明日でもいいと思っていると、夜中に嵐が来て桜が散ってしまうかもしれない。桜の美しさはいつかは散ってしまうという無常の儂さにあるのだと意訳できる。桜に限らず生花が美しいのは、その美しさが今しか見られないからである。そこが造花と決定的に違う点である。今この一瞬が放つ一度きりの輝き、その奇跡とも云える貴さが私たちの心を魅了するのであろう。

詩人の高見順は56歳で食道癌と診断された後、「電車の窓の外は」という詩に、こんな一節を書いている。「電車の窓の外は 光にみち いきいきといきづいてる この世と もうお別れかと思うと 見なれた景色が 急に新鮮に見えてきた」 死を受容するしかない立場になって初めて、彼は見なれた景色の一瞬一瞬に永遠の＜輝き＞を感じ、それを「新鮮」という言葉で表現したのではないか。生きた花こそ美しいと感じるあの感覚に通じるものがある。また黒澤明監督の映画『生きる』は、この無常観の美しさを、そしてこの一瞬を生きることの大切さを伝えている。主人公は市役所に勤務するパッとしない公務員で、毎日書類に判を押すだけの無気力な生活を送っていた。ある日、胃癌で余命いくばくもない事を知らされ落ち込むが、今、自分がやるべきことに目覚め、最後は住民の念願だった公園作りに奔走し、ついに完成させる。死と直面して初めて真に生きる事が出来るという姿が描写されている。この様に限りがあるからこそ、今を充実させられるという原則を知っておくことである。生あるものはいつか必ず滅びる。花の美しさは、ずっと続かない。無常だからこそ、死があるからこそ、人は美しいと感じるのである。諸行無常であり、全ては移ろいゆく死すべき存在であるからこそ、「今という瞬間」を無駄にしてはいけないのである。逆説的に表現すると死と向き合う事が生を豊かにさせる生き方に繋がる。黒澤明監督の『生きる』は、まさに死と向かい合う事が生を豊か

にすると訴えている。これから春を迎え桜の季節になる。ぜひ諸行無常という観点であらためて桜をご覧になって欲しい。きっと、桜は今までとは違った輝きを放っているように見えることだろう。死があるからこそ、豊かさを感じることが出来ることを知っておくことである。

最後にアメリカ人の女性が、10歳の息子を亡くし、その悲しみの思いを綴った詩を紹介する。

「最後だとわかっていたなら」 ノーマ・コーンネット・マレック著

あなたが眠りにつくのを見るのが 最後だとわかっていたら
私はもっとちゃんとカバーをかけて 神様にその魂を守って下さるように祈っただろう

あなたがドアを出て行くのを見るのが 最後だとわかっていたら
私はあなたを抱きしめて キスをして そしてまたもう一度呼び寄せて 抱きしめただろう

あなたの喜びに満ちた声を聞くのが 最後だとわかっていたら
私はその一部始終をビデオにとって 毎日繰り返し見ただろう

あなたは言わなくても 分かっていたかもしれないけれど
最後だとわかっていたなら 一言だけでもいい 「あなたを愛してる」と私は伝えただろう

たしかにいつも明日はやってくる でも もし それが私の勘違いで
今日で全てが終わるのだとしたら
私は今日 どんなに あなたを愛しているか 伝えたい

そして 私たちは 忘れないようにしたい

若い人にも 年老いた人にも 明日は誰にも約束されていないという事を
愛する人を抱きしめられるのは 今日が最後になるかもしれない事を

明日が来るのを待っているなら 今日でもいいはず
もし明日が来ないとしたら あなたは今日を後悔するだろうから

微笑みや 抱擁や キスをするための ほんのちょっとの時間を どうして惜しんだのかと
忙しさを理由に その人の最後の願いとなってしまったことを
どうして してあげられなかったのかと

だから 今日 あなたの大切な人たちを しっかりと抱きしめよう
そして その人を愛していること いつでも いつまでも 大切な存在だという事を
そっと伝えよう

「ごめんね」や「許してね」や「ありがとう」や「気にしないで」を 伝える時を持とう
そうすれば もし明日が来ないとても あなたは今日を後悔しないだろうから